

ドイツ印度学界の現状

玉井 威

この報告は一九七五年十一月現在のものである。筆者は一九七四年四月以来、西ドイツハンブルク大学東洋学部門に Dozent 講師として在職し今日に至るが、この報告はこの間に知り得たドイツ諸大学の印度学研究の状況の一端の紹介である。

現在、西ドイツにおいて印度学の講座を持っている大学は十七大学にものぼる。先づ次に、これら十七大学の印度学の活動状況を教授を中心に概観してみよう。

二

一、ハンブルク大学

言うまでもなく、ハンブルク大学の印度学科はドイツ印度学科中、最大であり、多くの授業数と充実した内容を誇っている。当印度学科については、かつて詳細な報告がなされているので、重複する部分は避け、その後の状況を中心に述べてみたい。Alsdorf 教授は、衆知の如くジャイナの世界的権威者であり、

幾多の偉大な業績をなした。名誉教授となった今も、二つの演習を担当している。Alsdorf 教授の後任 Prof. Wezler は、専門は文法学であるが、Nyāya, Vaiśeṣika 等の哲学方面にも重点を置いている。Paribhāṣā の翻訳研究や学位を得た教授は、最近、次の本を出版した。Bestimmung und Angabe der Funktion von Sekundär-Suffixen durch Paṇini (Wiesbaden 1975)。Prof. Schmithausen は、故 Bernhard 教授の後任として、一九七三年ウィーンスター大学より迎えられた。専門は瑜伽行派の教理、如来藏等にあり、現在、教授は瑜伽師地論の翻訳研究に従事している。これは既に公版された Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniscaya sangrahaṇi der Yogacārabhūmi (Wien 1969) に続くもの、いずれ出版されることだろう。梵語、サンスクリット語、漢訳を自由に駆使される教授は、佛教学において将来、最も瞩目されるべき学者となろう。彼の近業には次のものがある。Philologische Bemerkungen zum Ratnagotravibhāga (WZKSO XV, 1971), The definition of Pratyakṣam in the Abhidharmasamuccaya (WZKSO XVI, 1972), Spirituelle Praxis und Philosophische Theorie im Buddhismus (Zeitschrift für Missionswissenschaft und Religionswissenschaft 3, Münster 1973)。大学では、教授の担当する四課目のうち二を佛教テキストの授業にあてている。Ratnagotravibhāga と佛教における苦の問題を講じている。

ハンブルクで長く講師を勤める Dr. Srinivasan は、Rāmāyaṇa などの文学作品の研究で知られるが、今は Bharata の

Naṭyaśāstra の構成について研究しており、また彼の母国語であるタミールの文献の歴史研究にも従事している。

助手の Dr. Oetke は、金光明経 (Suvānaprabhāsaśūtra) について漢訳からの重訳のチベット訳本の研究で学位を得た。

金光明経については、かつてマールブルクにいた故 Prof. Nobel の梵語刊本、索引等がある。大学では彼は、Bengali, 言語学方面の授業の外、Prasannapada を講じている。Schmithausen 教授共々、佛教学に於て将来ドイツを代表する学者となろう。

Alsdorf 教授の下でジャイナ研究者であった Dr. Mette は、ミッテン大学に移った。

当学科では更に、多くのチベット学が講ぜられ、一つの特色となっている。その他、ヒンディー、タミール、ベンガリー、テルグー、モンゴル語等の授業が行なわれ、豊富な内容を誇っている。

なお隣接のイラン学科では、Prof. E. Emmerick が Khotansakisch や Sogdisch で書かれた Mañjuśrīnirvāṇaśāstra 等の佛教テキストの授業を行っており、この方面の層の厚さを示している。

最後に Nepal German Manuscript Project (NGMP) について一言しておきたい。これは現在ドイツにあるタミール将来の Sanskrit-Handschriften と Newari-Handschriften を写真に撮って整理し、目録を作るところである。Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG) は Deutsche Morgenlandische Gesellschaft (DMG) を頭づいてはなす project である。これは

はハンプルク大学の Wezler 教授が中心になって行なうことになっている。

二、ミッテンスター大学

ここにはヴェーダ学とバーリ学者として著名な Prof. P. Hacker がいる。Bhagavadgītā とバーリテキストによる Theravāda の教義を講じている。彼の近著には、Vrata (Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I Philologisch-historische Klasse, Nr. 5, 1973) である。A Critical Pāli Dictionary (C. P. D.) の執筆者として有名なオランダ人 Dr. B. Bollé は、現在ミッテンスターで中古インド語二課目、開講している。その他、ヒンドウイズム研究の Dr. Rüping 等がいる。

三、ボッフム大学

ここは日本学・中国学など極東方面の研究が著しく、インド学の方では注目すべきものは少ない。ただ教授資格論文に Analyse der Saṃnyāsa Upaniṣads を書いた Prof. J. F. Sprockhoff がインド有神論等を講ずる外は、ヒンディーと梵語が開講されているところである。

四、ケルン大学

Prof. K. C. Janert はパラスクリプト目録の編者として名高い。Gupta 碑文等を講じ、碑文の研究者でもある。Prof. R. Birwé は梵語文法学の権威として知られ、梵語 Syntax, Übung zur Indische Lexikographie 等を講じている。Prof. B. Kötter は Kautilya の Arthśāstra を講じているが、専門

は Newari, Tocharisch にあり、Tulu などのドラヴィダ語にも通ずる逸材である。カシミールの王の年代記を研究した彼の近著『Textkritische und philologische Untersuchungen zur Rajatāṅgī des Kalhaṇa (Wiesbaden 1971)』は高く評価されている。

五、ボン大学

主任教授はハンブルク大学から移った Dr. M. Hahn で、専門はチベット学である。彼の著書 *Lehrbuch der klassischen tibetischen Schriftsprache* は一九九一年(Wiesbaden)に初版が出て以来、早くも三版を重ね、チベット語の教科書として重用されている。大学では Nāgārjuna の Ratnāvali を漢訳と共に講じている。大学では Dr. R. Kaschewsky がいる。授業は持たなごが、『既述 Das Leben des lamaistischen Heiligen Tsong-khapa Blob-zah-graps-pa (1357-1419) dargestellt und erläutert anhand seiner Vita (Quellort allen Glückes) (Wiesbaden 1971)』の著書がある。Dr. Jorden はインド民謡の研究者である。

六、マインツ大学

Prof. O. v. Hinüber はハリー語、Khotan-sakisch の研究者であり、インド文化史も彼の専門とするといいである。律蔵の Mahākhanda 等を講じている。Prof. G. Buddrus は、インド近代史とインド近代語言語文文献の研究に従事している。

Tulsidas、ウルドゥ・ヒンディー文学などを講じている。

七、フライブルク大学

ここにはジャータカなどの佛教文学者 Prof. V. Schneider がいる。近著には *Der Somarab des Manu, Mythos und Ritual (Freiburger Beiträge zur Indologie, Bd. 4, Wiesbaden 1971)* がある。その外、講師の Dr. G. C. Tripathi がインドバー語を Pañcatantra の原テキストにしているの著書がある。Dr. R. Geib は Bhagavadgītā を講じている。

八、チュービンゲン大学

ヴェーダ研究において著名な Prof. P. Thieme がここにいる。Etymologie に重点を置くヴェーダ研究に特色があり、彼のもとから多くの勝れた学者が育っている。彼の多くの論文は集められて『Kleine Schriften (Glasesapp-Stiftung Bd. 5, Teil I, II; Wiesbaden 1971)』として出版されている。Prof. Thieme の後継者として活躍した Dr. H. P. Schmidt はヘリンドの Leiden に移った。代りに Prof. H. v. Stietencron がいる。Hinduismus といふ文化史が専門で、Dharmaśāstra を講じている。Gaṅgā und Yamunā zur symbolischen Bedeutung der Flussgöttinnen an indischen Tempeln (Freiburger Beiträge zur Indologie, Bd. 5; Wiesbaden 1972) が近著である。同じく Hinduismus 殊に Neuhinduismus を研究している助手の Dr. P. Schreiner がある。

九、ミッテン大学

ゲッテンゲンの Prof. Waldschmidt のインド学と Dr. Prof. D. Schlingloff は、アジヤンタ等の佛教美術と小乗佛教の研究で知られている。バーリ語等を担当している。Prof. F. Will-

elm は Arthaśāstra の研究とチベット学に従事しており、彼の講義は *Naiyaśāstra*、チベット語等である。ハンブルク大学から移った講師の Dr. A. Metta は、*Rgveda* 等を講じているが、専門はジャイナとチベット学である。その他二人の講師陣を揃えている。チベット学で著名な Prof. Hoffmann はアメリカに去った。

十、エールランゲン大学

Prof. K. Hoffmann は *Vedic* の文法学者として知られ、大学では比較言語学の立場からヴェーダを講じている。文法書として集大成とも言える J. Wackernagel の *Altindische Grammatik* (I-III, Göttingen 1896-1957) は、これら等三卷 *Nominalflexion* まで出ているが、等四卷動詞の部を彼は今、準備中である。講師 Dr. J. Nartan も同じく、ヴェーダと印欧語文法の専門家である。

十一、ザールブリュッケン大学

ここでは比較印欧語学科のもとで、言語学者 Prof. K. Strunk が梵語を開講しているのみである。

十二、フランクフルト大学

ここでは現在、Tocharisch を学べる数少ない大学の一つである。Göttingen の Prof. Waldschmidt のもとで学んだ Prof. W. Thomas が Tocharisch と梵語を開講している。彼は既に W. Krause と共に Tocharisch の入門書を出版している。Tocharisches Elementarbuch, Bd. I: Grammatik, Bd. II: Text und Glossar, Heidelberg 1960 (I), 1968 (II). また Biling-

nale *Udānavarga-Texte der Sammlung Hoernle*, Mainz 1971 の著書もある。講師の Dr. P. Stumpf は梵語を講じているが、彼にも *Der Gebrauch der Demonstrativ-Pronomina in Tocharischen*, Wiesbaden 1971. の近業がある。

十三、ヴェルツブルク大学

Prof. J. Kohl が *Pancatantra*、*Paṭaṅjali* の *Yogasūtra* 等を講ずる外、二人の講師がいてヒンディー、梵語を教えているのみである。

十四、ハイデルベルク大学

インド学のセミナールは *Stasien-Institut* におかれ、インド学に関する授業は全てここでおこなわれている。この研究所は、一九六二年に設立され、経済、政治、歴史、比較人類学等の十二の部門からなり、古典研究をも含め、広く現代問題を研究しようとするもので、特色あるものである。印度学のセミナールは第六番目に位置し、研究主任には Prof. H. Berger がなっている。梵語、*Upaniṣad* 等を講じている。彼のもとには CPD の執筆者、或は *Manorathapūraṇi* 等の校訂者として名高い Dr. H. Kopp が活躍している。彼はバーリ語を担当している。Prof. G. Sonthmeier は、宗教文化と *Marathi* を講じている。彼は又、第十、宗教史・哲学部門でも教鞭をとっている。その他、ヒンディー、ウルドゥー、タミール、ビルマ語等が講ぜられている。またこれら現代諸語は、第八部門現代語及び文学でも開講されている。

十五、マールブルク大学

チベット学、インド医学が専門の Prof. L. Vogel が、ここにいる。Na-ro-pa の Kram-thar を講じている。最近はナリ語の語彙の研究を発表している。Prof. W. Rau は言語、哲学、ヴェーダ、古代インド史と幅広い分野の研究で知られる。彼は又、最近、ヴェーダ文献によって考古学に関する著書を二冊出版した。大学では、Kharosthi-Urkunden aus Turkestan, Arthaśāstra 等を講じている。その他二人の講師がここにはいる。

十六、ゲッティンゲン大学

衆知の如く、ここには名誉教授 Walschmidt がいる。ヘルリンのトゥルファン原典の整理出版で著名で、この仕事を通じて幾多の俊才を育て上げた。現在その成果は、Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden として Teil III (Wiesbaden 1971) として出ている。また彼には、Ein zweiter Beitrag zur Rāgamañā-Ikonographie (Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse, Jg. 1972, Nr. 2), の近業がある。Prof. H. Bechert は Hinterindien の佛教、特にその歴史的、社会的な研究に従事している。彼の主著 Buddhismus, Staat und Gesellschaft in den Ländern des Theravāda Buddhismus は、現在第三巻 (Wiesbaden 1973) として出版されている。Dr. L. Sander は、トゥルファン文献の研究者として知られ、Walschmidt のもとで文献整理に従事している。Dr. G. Roth は R. Sanhityāyana が Tibet で発見したパラスクリプタに基づいて、Bhik-

ṇi Vinaya (Tibetan Sanskrit Works Series vol. XII, Patna 1970) を校訂出版した。これに Mahāsaṅghika-Lokot-taravādin 所属の Vinaya と言われるものである。大学では、インガリー、梵語等を講じている。その他ナリ語学者 Dr. H. Braun、Śatapathabrāhmaṇa を講じている Dr. G. v. Simson、ヒンディーとチベット語の講師等、多彩な陣容を揃えている。なお、法華経やジャータカなどの研究者、日本の湯山明氏もここに来ている。

十七、ヘルリン自由大学

この印度学科はインド美術史と Philologie 特にジャイナ研究が盛んである。まず、Prof. A. Gail は Hinduismus の宗教思想等の研究に従事し、Śivaismus、碑文学を講じている。Prof. H. Härtel は美術史が専門で、Mathura の美術を担当している。ハンブルク大学の Prof. Alsdorf の下で学んだ Prof. K. Bruhn は、ジャイナ美術の専門家である。Prof. Pinnow は非印欧語の研究者で、タミール、チャット語等を教えている。Prof. C. Tripathi は Ernst Leumann が集めた、現在 Strasbourg に保管されているジャイナの Handschriften の目録を作ることを試みている。大学では、Bharthari の Śatakatrayam 等を講じている。

以上、現在、西ドイツにおいて印度学の講義がなされている大学は、悉く概観し得たように思う。なおキール大学は、現在、休講中である。

因みにウィーン大学では、一九七四年五月、著名な Frau-

alner 教授が七十六才の生涯を閉じ、代って今はインド学部門
で Prof. G. Oberhammer が、チベット学佛教学部門で Prof.
Steinkellner が活躍している。

三

ドイツ印度学界全体の傾向を一言で言うことは難しいが、各
大学にそれぞれ特色があるにせよ、それは *alte Philologie* に
あると言えよう。*Philologie* は単なる言葉の研究に終るもので
はなく、言語学的研究と精神史的研究が密接に結びついた文献
学的研究である。これは又、ドイツ・アカデミズムの持つ歴史的
伝統でもあった。この特色は今でも変わりはない。学生の関心
も現代インドの問題にはあまり向けられず、おおむね古代イン
ドに向けられている。ハンブルク大学に一例をとれば、現代イン
ド問題をも欠かせないとする教授側の意見にもかかわらず、
学生の関心は、*alte Philologie* にあり、古典にあるのである。
ハンブルク大学は、Schubring, Alsdorf 両教授以来、ジャイ
ナ研究のセンターであったが、近年はヘルリン大学の方にその
中心が移りつつあるようである。代ってチベット学への関心が
最近高まり、授業課目(一九七五—七六年冬学期)中、チベット
語のみの授業だけでも、六を教えることが出来るのが、その証
左であろう。これにはチベット語を重視される Schmithausen
教授に負う所も大きいであろう。教授自身、古典チベット語一
課目を担当されている。ハンブルク大学以外にもチベット語を
重視する大学は多い。例えばボン、ミュンヘン等がそうである。

これに伴って、佛教学への関心も、やや高まりを見せてはいる
が、全体としてみれば低く、インド学研究一般との連関に於て、
佛教学はとらえられている。

以上のように、ドイツの印度学研究は全体として *alte Phil-
ologie* にあり、それは単に言語の研究のみでもなく、又それ
はなれた哲学のみでもなかった。広汎な言語学的基础の上に印
度学研究があることは注目されるべきことである。その意味で、
現代問題を多く扱うハイデルベルクの *Südasiens-Institut* は特
色ある新しい試みである。

四

次に学会、学術誌について触れておきたい。

第十九回 *Deutscher Orientalistentag* (ドイツ東洋学会
議)は、一九七五年九月末から十月初めにかけて一週間、南ド
イツのフライブルク大学で開催された。三年毎に開かれるこの
学会は、この種のものとしてはドイツでは唯一のものであり、
Deutsche Morgenländische Gesellschaft の活動の一環とし
てあるものである。会議は十二の部会に分かれ、印度学は第七
番目にある。その他、第九トルコ学・モンゴル・中央アジア学、
第十支那学・日本学等の関連部会のあることは言うまでもない。
筆者もこの会議に一部参加する機会を得たが、ドイツ国内の学
会と言っても、国際色が豊かで、近隣のオーストリー、スイス、
オランダ、デンマークはもとより、遠くインド、アメリカから
の参加発表者もあって、活発な質疑応答が繰り返されていた。

ドイツ発行の学術誌及びドイツ人学者が関係し、自らの論作を多く発表している学術誌については、本学の佐々木現順教授がかつて詳細な報告をされ、今もほとんど変わっていないのでここではただ最近ドイツで新しく発刊された学術誌 *Studien zur Indologie und Iranistik* (StII) について一言しておきたい。

これは、ハンブルク大学の Prof. Wetzler を中心に、マインツ大学の Prof. O. v. Hinüber、ホルランゲン大学の Dr. G. Klingenschmitt (イラン学)、『それに現在ネパールの Kathmandu の Nepal Research Center にいる Dr. M. Witzel (ヴェーダ学)』が編集者となって始められたもので、国内のみならず国外の印度学者、イラン学者にも開かれた国際学術誌である。この分野の学術誌としては、衆知の如く既にオランダの Leiden より *Indo-Iranian Journal* (II) が出ているが、StII はこの II を初め、現存の学術誌と決して競争するものでもなく、むしろ取って代わるものではないことを StII の編者は強調される。ただこの分野の比較的数量少ない雑誌に、更にもう一つを加え、発表の機会を多くすることが期せられている。

内容はいわゆる *Klassische Indologie* と古又は中古イラン学研究に限られるものではなく、新しいインド・イラン *Philologie* の分野にも開かれているが、重点は *philologisch-historisch* の分野にあるとされる。更にこれに加えて、インド学とイラン学との間にある伝統的な親密な関係を促進することにあると言われる。書評はこの学術誌には含まれない。

StII は国際学術誌であるからドイツ語、英語、フランス語

で書くことが要請されるが、英文以外の寄稿には、英文の要約を付け加えることが義務付けられている。

StII は年間少くとも一回発行されるが、第一号は既に発刊された。これには、ハンブルク大学 Prof. Alsdorf のチェービング大学 Prof. Thieme 等、著名な学者が寄稿している。発行所は左記の通りである。

A. u. I. Wetzler Verlag, D 2057 Reinbek, Langenhege 62b

五

最後に最も多くの授業数と内容を誇るハンブルク大学印度学科の授業課目を挙げておこう。一九七五年冬学期のものである。

1. *Lektüre eines Jainatextes* L. Alsdorf
2. *Lalitavistara* L. Alsdorf
3. *Zum Problem von Selbst und Seele in den Upanisaden und ihren Auslegungstraditionen* L. Schmitthausen
4. *Ratnagotravibhāga* L. Schmitthausen
5. *Übungen mit Textbeispielen zum Bhāsa-Problem* S. A. Srinivasan
6. *Einführung in die Textritik* S. A. Srinivasan
7. *Kulturgeschichte Indiens I* A. Wetzler
8. *Königtum im alten Indien* A. Wetzler
9. *Sanskrit I* A. Wetzler
10. *Bengali-Lektüre* T. K. Das Gupta
11. *Einführung in die Bengali-Literatur* C. Oetke

12. Probleme der Anwendung neuerer linguistischer Methoden auf indisches Material C. Oetke
13. Tulsidās (Fortsetzung) B. Singh
14. Leichte Prosalektüre B. Singh
15. Bengali I T. K. Das Gupta
16. Hindi I B. Singh
17. Deutsch-Hindi-Übersetzungen B. Singh
18. Hindi-Sprachübungen anhand eines Schallplatten-kurses B. Singh
19. Das Ideal des Herrschers in der alten Tamil-Literatur I H. Anton
20. Überblick über die moderne Tamil-Literatur H. Anton
21. Die Tamilsprache der Massenmedien H. Anton
22. Leichte Telugu-Lektüre: Bhaskararāyana S. A. Srinivasan
23. Übungen mit Textbeispielen zur islamischen Tamil-Literatur S. A. Srinivasan

24. Tamil für Anfänger I H. Anton
25. Milarepa K. Lotyo
26. Geschichte des Klosters Drepung K. Lotyo
27. Lektüre eines leichteren tibetischen Textes K. Lotyo
28. Prasannapada C. Oetke
29. Lektüre buddhistischer Texte L. Schmithausen
30. Lektüre eines mongolischen Textes A. Wezler
31. Neutibetisch K. Lotyo
32. Phonetik des Lhasa-Dialekts K. Lotyo
33. Einführung ins klassische Tibetisch L. Schmithausen

註

① 田端哲哉「ハンブルク大学の印度学研究」佛教学セミナー第一七号、昭四八年、大谷大学佛教学会、京都。

② 佐々木現順「ドイツ印度学界の現状」印度学佛教学研究第七卷一号、昭三三年、日本印度学佛教学会、東京。佐々木現順「ドイツ東洋学素描」印度学佛教学研究第一六卷一号、昭四二年。

(一九七五・一一・一一)